

「詐欺」否定 募る疑惑

AIJ社長ら参考人質疑

監視委「犯意明らか」

捜査当局と連携加速

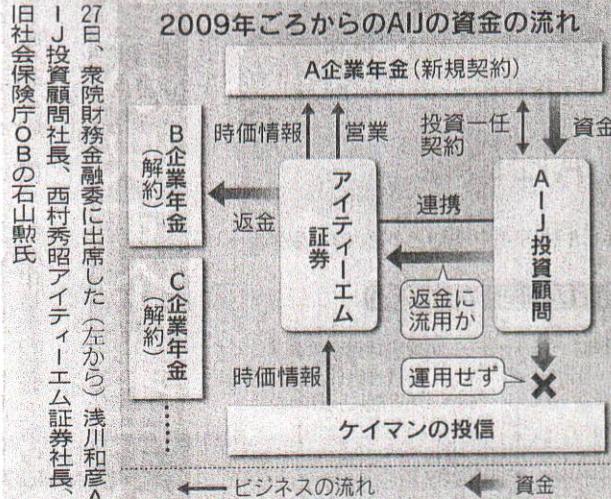


衆院財務金融委員会が27日開いた参考人質疑で、AIJ投資顧問の浅川和彦社長(59)は、顧客に虚偽の運用実績を説明した経緯を認める一方、「だますつもりはなかった」と繰り返した。取引等監視委員会は「明確な反証はなかった」と判断、刑事責任追及に向け捜査当局との連携を加速させる構えだ。

浅川社長「私が水増した数字を渡して、このように作ってくれないか」と言われて改ざんした。「私がすべて主導した」

長は各年金基金と投資一任契約を結ぶ際、運用先である私募投資信託の資産評価などを良好に見せかけた報告書を顧客に提示したことを認めた。

監視委が23日に強制調査で適用した内容は金融商品取引法違反(契約に関する偽計)の罪の成立には顧客を欺く意図を持つて虚偽を伝えることが構成要件となる。浅川社



27日、衆院財務金融委員会に出席した(左から)浅川和彦AIJ投資顧問社長、西村秀昭アイティエム証券社長、旧社会保険庁OBの石山勲氏

社保庁OB発言にぶれ

旧社会保険庁OBで年金コンサルタントの石山勲氏の存在が、新興の運用会社にすぎなかったAIJ投資顧問の受託拡大に寄与したとみられている。だが、27日の衆院参考人質疑に出席した石山氏は、自らを「被害者」と呼び、AIJに対して距離を置く発言に終始した。同氏が日本経済新聞の取材に答えた2日時点の発言も軌道修正した。

ポイント	参考人質疑(27日)	石山氏への日本経済新聞の取材(2日)
厚生年金基金への口利きをしたのか	商品の説明のためだけに基金に呼ばれることは全くない。AIJを引き合わせることはしていない(石山氏)	複数の複利の中に入れて、基金の情報提供した。AIJが基金に説明する際、同席したことがある
AIJの拡大に旧社保庁人脈を使ったのか	(旧社保庁人脈を使って)年金基金を取りつた。結果としてそうなった(浅川社長)	企業年金のイコハのイコハから教えた。理由はほとんどが旧社保庁OB。結果的に社保庁のネットワークを使った
虚偽運用に気づかなかったのか	どこがおかしいのか全く気づかなかった。新聞報道を見て初めて知った(石山氏)	AIJとのコンサルティング契約を3~4年前に解消した。情報開示に対して意見が相違した

浅川社長は27日の参考人質疑で厚生年金基金に初めて買ってもらった先が、石山氏が常務理事の都内の厚生基金だったことを明らかにした。浅川

「想定内」(監視委関係者)。問題は顧客に虚偽を告げた、その「犯意」だ。「だます目的で運用したつもりはない。はくちをしたという覚えも全くない」

外形的事実を認めながらも、違法行為の故意にについては否認する。運用の意思があり、配当可能性もあったとする浅川社長の弁明は一見、周到に準備を重ねた疑惑解明の焦点をそらしたかのように見える。しかし、監視委の受け止め方は大きく異なる。

この日の質疑で浅川社長は、私募投信の販売単価水増しを認めており、監視委幹部は「ウソの内容と認識しながら顧客に報告書を示した時点で犯意は明らか。『だますつもりはなかった』との答弁は詭弁(きべん)に等しい」と言い切る。

「私たちのファンドは募集額が決まっており、売れる人と買う人で権利が変わるだけだ。全体の運用額は基本的に変わらないので、穴埋めしているという認識はない」

一連の問題を巡っては、同社が2009年春以降、新規の顧客から受託した資産550億円をそのまま別の顧客の解約

このため監視委は、新規顧客の受託資産の流れについて①営業を担当したアイティエム証券の国内口座を通じ、そのまま払戻金に充当した②私募投信を経ずに投資事業組合に資金を流し、運用しないまま払戻金に充当した③という2つのケースを想定。詐欺容疑での捜査も見据え、東京地検特捜部との協議を始めている。